

【今年度の結果と取組みについて】

〇●国語●〇

(領域ごと)

- | | |
|------------------|---------------|
| ①言葉の特徴や使い方に関する事項 | 課題が残る結果であった |
| ②我が国の言語文化に関する事項 | やや課題が残る結果であった |
| ③A話すこと・聞くこと | やや課題が残る結果であった |
| ④B書くこと | 課題が残る結果であった |
| ⑤C読むこと | やや課題が残る結果であった |

(問題形式)

- | | |
|------|---------------|
| ①選択式 | やや課題が残る結果であった |
| ②短答式 | 課題が残る結果であった |
| ③記述式 | 課題が残る結果であった |

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

- ・1三(話の主題を捉え、質問すべき内容を選択する問題)が最も正答率が高い。
- ・3二(文章の展開・構成・内容について、良さを見つけて記述する問題)が最も正答率が低く、最も無解答率が高い。
- ・1一(同音異義語の問題)、2一(1)(登場人物の行動や気持ちを選択する問題)が最も無解答率が低い。

分析

・全体的に昨年の結果と比べても課題が残る結果となったが、子どもたちの国語力は少しずつ向上している。無解答率に関しては、概ね良好な結果であったので、子どもたちの主体的に取り組もうとする態度は高いのではないかと考える。

・3二の設問に関しては、最も正答率が低く、最も無解答率が高い結果となった。問題形式が記述式であったことから、今後の授業では、子どもが自分の考えを書くことを意識した授業を展開し、力を育んでいく。

・現在、中学校ブロックとも、授業改善を進めており、今年度より「読解力を柱とした授業づくり」に取り組んでいる。この取り組みを進めていくことにより、子どもたちの国語力を高めていきたい。

○●算数●○

(領域ごと)

- ①A数と計算 課題が残る結果であった
- ②B図形 やや課題が残る結果であった
- ③C変化と関係 やや課題が残る結果であった
- ④Dデータの活用 やや課題が残る結果であった

(問題形式)

- ①選択式 概ね良好な結果であった
- ②短答式 やや課題が残る結果であった
- ③記述式 課題が残る結果であった

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

- ・1(1)(1050×4 の乗法)が最も正答率が高い。
- ・2(3)(二つの数量の割合を問う問題)が最も正答率が低い。
- ・1(3)(除法を用いて解く理由を言葉と数式で記述する問題)が最も無解答率が高い。
- ・2(2)(百分率で表された割合・基準値から比較量を求める問題)の無解答率は全国より低い。

分析

・プログラミングについての設問は、全国平均に近い正答率であった。校内でタブレットを活用した学習の成果だと考える。今後も取り組みを継続していく。

・全般的に無解答率は高くはないが、問題形式が記述式であった場合、無解答率が高く、解答を描き始めても最後まで書ききれない傾向がある。

・記述式の設問に対し、立式はできるが、立式の理由や意図を正確に説明できていない解答が目立つ。低位層やEP層の語彙力や論述の能力について、他教科とリンクさせながら培っていくことが大切である。

・全体的に記述式の問題への解答率が低かったため、既習事項を活用し、考えの根拠を明らかにしながら筋道を立てて説明する力、表現する経験をペアやグループ活動を通して積み重ねていく必要がある。

○●理科●○

(領域ごと)

- ①エネルギー 概ね良好な結果であった
- ②粒子 やや課題が残る結果であった
- ③生命 概ね良好な結果であった
- ④地球 やや課題が残る結果であった

(問題形式)

- ①選択式 やや課題が残る結果であった
- ②短答式 概ね良好な結果であった
- ③記述式 やや課題が残る結果であった

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

- ・1(1)(提示された観察記録をもとに答えを選択する問題)が最も正答率が高い。
- ・2(1)(メスシリンダーの名称を答える問題)は全国の正答率を上回る
- ・2(4)(砂糖水以外の凍らせた水溶液が水に沈むかどうかという新たな問題に気付いて記述する問題)が最も正答率が低い。
- ・3(4)(色と熱の関係から理由を探り、実験結果を分析して記述する問題)が最も無回答率が高い。
- ・1(1)、3(1)(反射した日光の直進する性質を用いて選択する問題)が最も無解答率が低い。

分析

・選択式の設問等においては無解答率が低く、理科に対しての意欲があるように考える。
また、全体を通して全国平均とほぼ同ポイントで、大きな差はみられない。

・記述式の設問等においては、自分自身の意見を書き表すことに苦手意識がみられ、無解答率が高くなる。

・記述式の設問に対しては、どのように文章に書き表すのかという「表現力」にも課題が見られるため、日頃からふり返りや意見を書く等を行い、文章を書く機会を増やしていく必要があると考えられる。

○●経年比較●○

全体的な傾向についての分析

- ・ここ3年度分は正答率が全国平均を下回っている。国語の条件作文や算数の記述式問題で課題が大きい。
- ・ここ数年間は無解答率が低いこともあれば高くなることもある。文章力や論理的説明に課題のある児童が記述式の問題に前向きにとりくむことができていないことが原因と考えられる。
- ・無解答率の比較から、算数よりも国語での無解答が目立つ。

学力高位層と学力低位層、エンパワー層についての分析

- ・高位層が少ない年度は低位層が多く、高位層が多い年度は低位層が少ないという傾向が見られる。学び合いの授業を充実させてきたことが、低位層の減少に繋がっていると考えられる。

○●取組み●○

学力向上に関する取組み

○授業力向上にかかわって

〈継続していくべき取組み〉

- ・1年生の段階からペアによる学び合いの場を授業の中に設定し、学力低位層の子どもたちが安心して「わからない」「教えて」と言える集団づくりを心がける。学び合える関係を育むことでEP層の縮小を図る。
- ・子どものわからなさ、間違い、疑問、気づきを大切に取り扱い、授業を展開していくことを心がける。
- ・ペアやグループ活動の中で、他者のつまずきやわからなさがどこにあるのかを対話の中から推察したり、相手に伝わるように言葉の選択や展開の組み立てなどを意識して説明・論述したりする経験を重ねていくよう努める。
- ・子ども同士の対話と思考を保障し、諦めずに課題と向き合えるよう、ペア・グループ活動による交流や全体交流を授業中の活動の中心に据える。
- ・学力高位層と低位層がともに学力向上することをねらいとし、多様な考えが生まれたり、複数の解法があったり、既習事項をいくつか絡めて解いたりする教材を中心課題として設定する。
- ・子どもたちに授業のふりかえりを記述してもらい、何がきっかけで何がわかったのか・何がわからなかったのかを授業者が把握し、以降の授業展開に活用していく。
- ・授業改善担当者を中心に、研究授業や授業観察の中から、子どもが学びに向き合うのはどんなときなのかを検証し、校内でフィードバックや検討会を行う。

○基礎学力の定着にかかわって

〈新たな取組み〉

- ・ひらがな、カタカナ、九九などの学びの基礎となる読み書き計算の定着を検証するため、「ひらがな検討会」に加え、の取組み結果を検証する。また、「さんすうチャレンジ」については、児童の実態をアセスメントする一つの指標とする。

〈継続していくべき取組み〉

- ・本校児童の学力にかかわる課題を明確にし、つまずきを早期に発見していく。また、つまずきを補うための学力や知識について、補充課題を作成、使用していく。
- ・文章を読み取る力や語彙力を増やすため、委員会活動や保護者への呼びかけなどで読書を推奨し、読書量の確保と読解力の向上に努める。